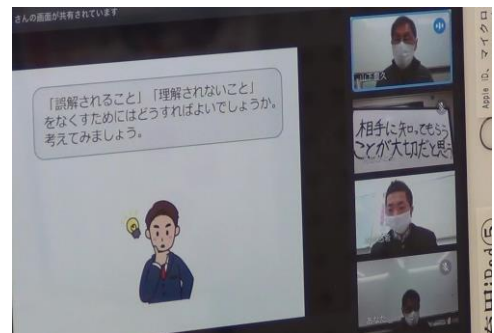


学校名	兵庫県立姫路聴覚特別支援学校
1 ICT を活用した自立活動指導の実践	
(1) 指導期間・指導時数 令和4年9月26日～12月9日 1回1時間（準備含む） 計4回4時間	
(2) 使用した遠隔システム Google Meet（グーグル・ミート）	
(3) 指導目標 ○長期目標 ・自分自身の聞こえにくさについて知り、聞こえにくさへの対応力を身に付けるとともに、コミュニケーション力を高める。 ○短期目標 ・遠隔システムを利用するにあたり、聞こえやすくする方法や、伝えやすくする方法について考えるとともに、自身の聞こえについて振り返り、聞こえにくさへの対処法を再確認する。 ・語彙力を高め、一般常識や慣習などについての理解を深める。 ・難聴の中学生とのオンラインでの交流を通じて、それぞれの聞こえにくさに対する困り感や障害認識・障害受容に対する考えを知り、意見交換をする。	
(4) 自立活動の区分・項目 2 心理的な安定 ③障害による学習上又は生活上の困難を 改善・克服する意欲に関すること。 3 人間関係の形成 ① 他者との関わりの基礎に関すること ② 他者の意図や感情の理解に関すること ③ 自己の理解と行動の調整に関すること ④ 集団への参加の基礎に関すること 6 コミュニケーション ③言語の形成と活用に関すること。 ⑤ 状況に応じたコミュニケーションに関すること。	



(5) 指導内容

1 回目「言葉のクイズ」(一般常識的な言葉)

「聞こえにくさを感じる場面について考えよう」

学校、家庭生活のさまざまな場면을提示して、その時の自身の聞こえについて振り返った。

2 回目「聞こえにくさへの対応について考えよう」

それぞれが「聞こえにくい」と感じる場面が異なることに気づかせるとともに、自身の聞こえにくさへの対応を振り返った。

3 回目「誤解されること・理解されないこと」

「こんな考え、どう思う？」

難聴の人が周囲から誤解されたり、理解されにくかったりすることを提示して、同じような体験をしたことがあるかを振り返り、そのようなことをなくすために何が必要かを考えた。

また、難聴成人の自身の障害受容や障害認識についての考え方についてどう思うかを話し合った。



(6) 指導の手立て

- ・興味関心をもって取り組めるように、クイズ形式で学べるようにした。
- ・パワーポイントでイラストや写真を提示しながら、記憶に残りやすいように視覚的な情報を多く取り入れることで、語彙の定着を図った。
- ・同じ障害のある生徒とつながることで、学校生活や家庭生活での困りごとや悩みごとなどについて共感しあったり、話し合ったりして、交流できる場面を設けるようにした。

(7) 指導上の工夫

- ・聞き手の判断で、ヘッドセットが装用できるように準備した。また、話者の声を聞き取りやすくするために高品質音声マイクを使用した。
- ・会話の中で、理解できていない言葉や深めたい内容があった際に、小さなホワイトボードを用いて、カメラに向けて提示するなど、スムーズに活動ができる方法を考えた。

(8) 校内の指導体制

- ・スムーズに行えるように場所の確保など、協力体制を整えた。
- ・指導者は、地域支援・通級担当がおこなった。

(9) 関係機関との連携（在籍校・保護者・医療・福祉等）

- ・ 専門家として、兵庫教育大学の先生にご依頼して、ご指導・ご助言を頂いた。録画をしておいた遠隔指導の様子を見ていただいて、2人の対象生徒を繋いでの効果的な指導の進め方や資料や教材の提示のしかた等のヒント等をいただいた。
- ・ 在籍校とは、密に連携を取り合い、事前の打ち合わせや機器の接続についての準備をおこない、指導後は、成果などをうかがった。
- ・ 保護者には、指導の様子や内容について、対面での指導の時にお伝えするとともに、指導後の保護者に述べた感想・意見等をうかがった。

2 成果と課題

児童生徒の変容 (指導開始前) ・ 対面での指導時には、下を向いたまま小さな声で発言することがあった。 ・ 対面で容易に情報が入ってくる状況では、聞き逃すことがあった。 ・ 同じ難聴の中学生と交流したことがなかったため、自分の困り感や悩みを共有できる人がいなかった。	(指導開始後) ・ オンラインでは小さな声やうつむき加減では相手に伝わらないことがわかり、大きな声ではっきり発言することを心掛けるようになった。 ・ 画面越しで聞き取りにくさを自覚する状況では、集中して聴くことができた。 ・ 同じ難聴の中学生との交流を通して、困り感や悩みの共有ができた。また、障害の程度や困り感の違いがあることを知った。
成果 ・ パソコンなどからの聞き取りや相手への伝え方の難しさを体感することで、自身の聞こえについて知り、聞こえにくさや伝えにくさへの対処法を考えることができた。 ・ 視覚的な情報を画面で指導者の顔と同時に提示できたため集中して聴くこともできたので、生徒たちにとって理解がしやすかった。 ・ 在籍校の先生方にはご面倒をおかけしたが、通級での指導の様子を見ていただくことができ、生徒の思いがけない実態（語彙力の無さ、常識的なことを知らないなど）や生徒たちの困っていることなどを知って頂けた。 ・ 対面指導時には保護者に引率してもらって通級指導を行っているため、保護者の引率の都合上、対象者2人での交流の対面指導は難しいかったが、遠隔での指導により、対象生徒2人の交流での指導が可能になった。	
今後の課題 ・ 指導者が遠隔システムの知識を高め、もっと多様な指導の方法を考える必要がある。 ・ 遠隔指導だけでは、指導内容が定着したかどうかの確認が難しいので、対面指導で定着度を再確認する必要がある。 ・ 難聴遠隔通級指導では、実施に当たっては、在籍校の先生方のご理解とご協力が必要となるため、日程の調整が難しい。また、Wi-Fi 環境や県と市町とのセキュリティの問題で、突然繋がらなくなったり、ミーティングに参加できなくなったりなどのトラブルが起こることがある。	

3 ICT を活用した自立活動指導についてのコメント (児童生徒、保護者、教員等の声)

児童生徒…オンラインで画面上での指導は新鮮で楽しい。自分以外の難聴のある中学生と繋がることで、自分と同じ困りを共有でき、自分が考えなかった聞こえにくい時の対応を知ることができてよかった。

保護者…自分以外の難聴のある中学生との交流できる機会ができてよかった。自分の聞こえにくさや聞こえにくい時の対応について改めて振り返ることができたようだ。自宅でオンライン通級が可能であれば、引率する必要がなくなるので有り難いと思う。

教員…学校で通級指導の様子を見ることができ、生徒の思いがけない実態（語彙力の無さ、常識的なことを知らないなど）を知り、支援や配慮の必要性をあらためて感じた。学校での実施となると、時間の設定や落ち着いて指導を受けることができる場所の確保が難しい。

4 添付資料

- ・指導に用いたパワーポイント